

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 28 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720397

研究課題名(和文) スラム観光をめぐる人類学的研究 ラテンアメリカの現状から

研究課題名(英文) Anthropological research about Slum tourism

研究代表者

内藤 順子 (NAITO, JUNKO)

早稲田大学・理工学術院・准教授

研究者番号：50567295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：観光とは、観光地となる場所やそこに暮らす人びとに利益と悪影響を表裏一体でもたらす現象である。本研究ではプロプアー(貧困にやさしい)という理念のもと、ここ数年でツアーとして商品化され、世界の複数都市において実施され始めた「スラム観光」についての人類学的調査研究である。スラム観光は貧困者の生活基盤確立に寄与するのか、倫理的な問題はいかに検討されクリアされるのか、利点と弊害を多角的な考察を進めた。

研究成果の概要(英文)：Based on the philosophy that in the present study Pro-poor, is commercialized as tour in the last few years, it is anthropological research on "slum tourism" which began to be implemented in multiple cities around the world. Slum tourism or to contribute to the livelihood establishment of the poor, and what ethical issues are cleared been examined how, advancing the multilateral consideration the benefits and adverse effects.

研究分野：文化人類学

キーワード：スラム観光 貧困 ラテンアメリカ プロプアー

1. 研究開始当初の背景

都市スラムについての研究は、研究開始当初においては人類学、社会学、経済学、開発学といった各分野で膨大な蓄積があったが、ほとんどが解消法を模索しており、解決のために、その成り立ちや生活環境を調査分析するものであった。そこではスラム自体が観光資源になるということは想定されていなかった。旅行産業としてのスラム観光は、2006年のブラジルで始まった現象であることからわかるように、それ自体が新しいために報告書レベルの資料が数点あるのみで、まだ研究の蓄積はあまりなく、ツアーの旅行パンフレットや、参加した人のツイートやブログで情報が散見される程度であった。スラム観光は都市によっていくつかの形態があるが、いずれもが基本的に弱者（貧困者）への利益還元を念頭に置いている点で、「プロ・プアー・ツーリズム」(以下 PPT)と密接な関係にあるといえる。PPTとは「貧困者(社会的弱者)に配慮した観光」や「貧困に優しい観光」と訳される、社会的弱者に利益がもたらされることを重視した観光のことである。これは1980年代に提唱され始めたマス・ツーリズムに対するアンチテーゼであり、国内では高寺が2004年に初めてPPTについて紹介し、いくつかの事例を用いてその思想内容を説明しているが、現場におけるPPTのとらえ方や、実際に携わる人間の声が描かれていたわけではない。その後、社会的弱者と観光を主題として扱った論文が国外で出され、国内では研究著書が2010年に出版されている。これらに特徴的なのは、既存の枠組みから観光現象をとらえるのではなく、観光の場と、そこにかかわるアクターに焦点を当てて、現場からPPTを考察する立場を打ち出している点である。この視点の置きどころは本研究においても参考とした。ただし、社会的弱者と観光の関係についての研究は、自然環境とかわる少数民族と先住民族を中心とした「プアー」な人びとである。本課題では同じ「社会的弱者」であっても、都市における「プアー」すなわちスラム住民を対象とすることとした。その意味ではPPTの研究動向と視角を参照しながら、独自に現場から切り拓いていかなければならない研究となったのである。

2. 研究の目的

本研究では、2005年前後から世界の複数都市において実施されはじめた「スラム観光」についての人類的調査研究を行う。観光とは、その対象に利益と悪影響を表裏一体でもたらす現象である。スラムそのものが観光資源(利益の源)になるという、これまで想定されなかった事態の現状把握をとおして、観光はいかに貧困者の「生活基盤」の確立に寄与できるのか、できない

のか、その利点と弊害について多角的に検討することを目的としている。具体的には、スラム観光がすでに定着しつつあるメキシコと、それにやや遅れて注目されるようになったブラジル、そして目下着手し始めたチリ、それぞれ経験年数の異なるラテンアメリカ3カ国でのフィールドワークによる比較分析をとおして、スラム観光の可能性と今後についての実践的な提言を試みる。

3. 研究の方法

本研究では、都市におけるスラム観光についての(1)現状把握、(2)地域間比較、(3)プラスとマイナスを含めた今後の可能性をさぐる、(4)研究成果の公開、以上の事柄の達成を目指している。

そのため、実際に行われているツアー(メキシコシティ Garbage Dump Tours、サンパウロ Favela Tour)のフィールドワークと、目下「プロ・プアー」の思想を輸入して、スラム観光の模索・検討段階にあるチリにおける調査とを並行して行う。

ここでは、倫理的問題(スラムを観光するという、一方で人権侵害が懸念されている点)がどのように現場で理解され、乗り越えられているか、あるいは乗り越えられていないのか。そうした問題をはじめ、見どころ(プラス効果)についても観光客および企画者、スラム住民それぞれに対して調査を行う。

また、スラム観光が新しい現象だけに、随時テーマにかかわる資料検索および文献研究を行う。

調査分析を通して、今後のスラム観光が実質的にどのように貢献しうるかを具体的に明示し、研究成果を広く公開する。

具体的には、以下の2点を実施。

観光にかかわるすべてのアクターへの聞き取りと参与観察：

スラム観光に参加する者(ホストとしてのスラム住民、観光に訪れる者)仲介としての企画者、観光ガイド、それぞれにとってのインパクトを把握する。また、関係するNGOまたはNPO、旅行社の聞き書きおよび同行観察を行う。

観光に関連する概念整理：

オルタナティブ・ツーリズム、プロ・プアー・ツーリズム、コミュニティ・ベースド・ツーリズムといった、本課題にかかわる概念枠組みはいくつもあるが、実際のところ研究者によって使い方がまちまちである。たとえば先のPPTについていえば、定義自体がまだ定まらないこともあり、先住民族や少数民族などもPPTでいうところの「プアー」の範疇にはいつているが、都市スラム住民と同列でよいのか迷うところがある。こうした問題解消のため、関連す

る概念整理を行う。

4. 研究成果

当初の計画では、ブラジル・メキシコ・チリのフィールドワークによる地域間比較を予定していたが、ワールドカップおよびオリンピック開催にともなうブラジルの滞在費・必要経費・旅費の高騰により実施が困難と予測されたので、計画を変更した。というのも、チリにおいて国としてはじめてスラム観光が構想される現場に、代表者自身がプレーンとして参加することになったため、集中して参与型あるいは「形成的フィールドワーク」の実施がより実りあると判断したからである。

(1)チリにおける政策レベルでのプロブアー思想の把握

チリ・サンチャゴ市における、プロブアー・ツーリズムという、「開発途上地域の観光地とそこに暮らす貧しい人びとに利益がもたらされるように配慮した観光」の実施をめぐる現場を取り上げる。国際的には2003年に世界貿易機関(WTO)によって「ツーリズムは、貧困削減、雇用創出、社会調和の推進力である」というテーマが掲げられ、観光は貧困削減や南北問題などのいわゆる地球規模で取り組まれる課題に対してその重要性を増してきており、チリでは、2002年から始められた「チリ国家連帯(Chile Solidario)」という貧困克服プログラムの延長として、プロブアー(「貧困に優しい」)の思想が取り入れられ、その一形態としての「スラム観光」の導入が検討された。それは文字どおり、観光客が「観光地=スラム」を訪問し、その収入をスラムに還元してスラムの生活環境を改善するという実践である。観光客を案内する役をスラム住民が引き受け(雇用創出)収入を得て(貧困削減)、スラムの生活を知ることとおして相互理解(社会調和)へむかうという意味で、WTOのスローガンに合致するものとして注目されたことのである。

(2)代表者自身がプロブアー政策の一環としてのスラム観光計画立案準備に参画するという「形成的フィールドワーク」を実施できたこと、それ自体が一つの成果といえる。

(3)チリにおける萌芽段階のプロブアー政策にかんする詳細な「感情の民族誌的調査」の実現

アジアの一部諸国と南米の近隣諸国でスラム観光がポピュラーなものになりつつあるなか、チリでは極めて慎重に「スラム観光」導入にあたっての吟味とぶつかり合いとりわけ倫理と人権をめぐる問題が生じた。本格的導入に先んじて試験的に実施されたのは、チリ人の大学生による「スラム体験観

光」であった。明確な階層社会であるチリにおいては、大学へ行く階層の人びとがスラムに足を踏み入れることはめったにない。メディアやニュースを通して、また通りすがりの景色としてスラムを認識してはいても、貧しい暮らしがどのようなものであるのか知る機会はなく、知る必要もないのである。そうした学生たちは、目の当たりにしたスラムの現実について、想像を超えた劣悪な環境下で貧困者たちが自分たちと同じように笑っていて驚いた、といい、また涙する者もあり、先遣隊としての学生たちが受けたインパクトはかなり強かったといえる。また、スラムを見物する、という良くも悪くも「一時的感情」あるいは「感覚的感情(sensation)」を刺激する実践について、計画立案は紆余曲折した。

学生を含む携わった当事者たち、そして巻き込まれたスラム住民たちは様ざまな感情を表出し、いっぽうで感情を操作するようにして計画が方向づけられていったり頓挫したり、一部の人びとは倫理的ふるまいを余儀なくされもした。

社会的に構成され、望ましいとされる感情規則に従って、自らの感情を適切に操作しながら人びととのかかわるという意味では、スラム観光の計画立案に携わる仕事はもちろん、ガイド役を引きうけるスラム住民もまた「感情労働者」(A.R.ホックシールド『管理される心：感情が商品になる時』)ともいえる状況に置かれている。そうした現場に立ち会ってきた代表者に吐露されたことば、代表者をも操作のコマとするような思惑、感情のせめぎ合いの起こる絶えず目まぐるしいアクチュアルで「人間的」な、全人的営みとしての開発実践について詳細な経過を追うことができた。

このことは、「感情の人類学」にとって方法・内容ともに新しい示唆を与えうること、

チリに限らない、スラム観光およびプロブアー政策への提言をしうること、の2つへの展開が見込まれることを付言しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

内藤順子「小さき人びとたちのプロジェクト：様ざまな他者の価値観のあいだで生きること」2015年3月、『人文社会科学研究』55号、査読なし、215-232頁

内藤順子「聖地サンチャゴ・デ・コンポステラの現在：巡礼と観光をめぐる素描」2014年11月、『交流文化』14号、査読なし、14-25頁

内藤順子「貧困概念の悪循環について：チリにおける文化人類学的考察」2014年3月、『人文社会科学研究』54号、査読なし、79-94頁

(2)研究分担者 なし
(3)連携研究者 なし
(4)研究協力者 なし

内藤順子「プロブアー・ツーリズムの可能性：スラム観光から考える」2012年3月、立教大学観光学部、『交流文化』vol.12、査読なし、22-33頁

〔学会発表〕(計3件)

内藤順子「支援の場における<経過主義>の余地を求めて」2012年、国際開発学会第22回全国大会、於名古屋大学

内藤順子「スラム観光の実施をめぐる感情的葛藤」2012年6月、日本文化人類学会第47回研究大会、於慶應義塾大学

内藤順子 シンポジウム「地域社会を創る」コーディネーター、2015年1月、早稲田文化人類学会、於早稲田大学

〔図書〕(計1件)

内藤順子(共著)「スラム観光をめぐる感情的葛藤のフィールドノート」『実践と感情』関根久雄編著、春風社、184-206 2015年9月刊行予定(印刷中)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

内藤 順子 (Junko NAITO)
早稲田大学理工学術院・准教授
研究者番号：50567295